

McC. Brooks, Ch. and Cranefield, P.F. (eds):
The Historical Development of Physiological
Thought. Hafner, New York, 1959.

六 投稿原稿は、コピーを一部添付すること。原稿は著者校正の際も原則として返却しないので、手元にコピーを一部残すこと。

七 著者校正は、原則として原著・総説・研究ノート・広場・資料を対象とし、初校のみとする。校正は印刷上の誤植を訂正するに留め、原稿の改変や、その他の組み替えは認めない。校正刷りの返送期日を厳守すること。期日までに返却されない場合は責とみなす。

編集後記

一〇月一四、一五日の両日にわたって京都府立医大図書館ホールにおいて行われた第一〇一回総会および学術大会は、中橋彌光会長以下、京都医学史研究会の全面的なバックアップのもとで成功裡に終わった。同時に行われた京都の看護・保健・助産史に関する企画展示も見応えがあり、いずれ論文化をお願いしたい。▼演題数の増加はたいへん結構なことであるが、その分、発表・質疑応答の時間が削られ、教育講演・シンポジウムといった企画も立てられない。演題の内容によって発表の会場を分けるか、ポスター発表を増やすといった工夫が必要となろう。

八 刷り上がり一〇印刷ページ(四〇〇字詰原稿用紙で二四枚)までは原則として無料とし、超過分と図表製版の実費は著者負担とする。

九 論文別刷は五〇部単位とし、実費で作製する。別刷希望者は校正刷同封の申込書に部数を明記すること。

一〇 原稿の送り先

〒二二〇〇三 東京都文京区本郷六一一七一九

本郷綱ビル二階

財団法人日本学会事務センター学会共同編集室内、
日本医史学雑誌編集委員会

▼本誌も投稿原稿が増え、掲載までに時間がかかっている。投稿者の意欲をそぐようなことにもなり、これもなんとかしなければならぬ。現在、年間四号分の総頁数は七一〇が限度である。予定していた「医史学関係文献目録(一九九九年)」も次年度送りとなった。▼医学部内にかぎらず、一般に医史学は不要不急の学問と考えられている。学生もなかなか過去に目をむけようとしぬ。役人にも学生にもそっぽを向かれたら、医史学の立つ瀬はない。新しい世紀は医史学の存在をアピールできるようにしたいものである。(新村 拓)